

## 1-2-15a言語／言葉

ここでは、「言語」についてお話しします。

まずは、「分節行為」。

その前半です。

### ①分節

#### i) 生きるか死ぬか

賞味期限が切れた食品、食べますか？

「全然気にならないよ」という人もいれば、「絶対いや」という人もいるでしょう。

私は、基本、「全然気にならない」派ですが、あまりに古い場合は、少し食べてみてから決めます。

ここには、「食べるか食べないか」の区別がありますが、そもそも何でそんな区別が必要なのでしょうか。

大げさにいえば、「生きるか死ぬか」にかかるからです。

道を歩くときにも、「ここを歩いても大丈夫かどうか」を区別しているから普通に歩けるのであって、そうでなければ、人や物にぶつかったり、車にはねられたりするでしょう。

人間だけでなく、すべての生物が生きるためにこのような区別をしています。

それを「**分節行為**」といいます。

#### ii) 混沌→秩序

私たちがこの世界を分節しなければならないのは、もともと、この世界が混沌とした世界だからです。

たとえば、山に生えているキノコ。

君は食べますか、食べませんか。

いや、そもそも食べられるかどうか、分かりませんよね？

だから、普通は食べません。

じゃあ、スーパーで売っているキノコは？

こちらは食べられると分かっているから、食べるはずです。

当たり前の話ですが、、、

キノコは最初からスーパーに売っていたわけではありません。

最初は、山に生えていた、、、はず。

この世界も、そもそもは、「山に生えているキノコ」でした。

ものごとが分けられていない、だから、何をしていいのか分からぬ。  
そういう混沌としたものでした。

でも、それでは生きていけません。  
「スーパーで売っているキノコ」のように、こうすればいいと分かる秩序ある世界にしたい。  
そのために、世界を区切ることを分節というのです。

簡単にいえば、、、  
世界はもともとは混沌として、そのままでは生きていけないから、区切って、よく分かる世界にしよう、という話です。  
だから、分節とは、秩序化、私たちが生きるための秩序を生み出す行為だといえます。

私たちが現に生きていられるのは、この世界がすでに分節され、秩序をもったものだからです。  
そのせいで、この世界がもともと混沌としていること自体をなかなか理解できません。  
が、この世界のデフォルトは混沌だからこそ、私たちは生きるために分節する必要がある、ということを確認しておきたいと思います。

### iii) 恣意性

ただ、「生きる」ためだといっても、それは生物的な意味だけではありません。  
たとえば、最近はやり（？）の昆虫食。  
ゲッと思った人もいるでしょう。  
でも、タイなどでは、コオロギの唐揚げが屋台に売っているそうです。  
カミキリムシの幼虫が最高のご馳走である地域もあるようです。  
日本でも、イナゴの佃煮がいまだに食べられていますし、戦時中は蚕も食べていました。

「食べられるか食べられないか」でいえば、昆虫は食べられます。  
が、「食べたいか食べたくないか」でいえば、食べたくない人も多いでしょう。  
たとえ食べられるものであっても食べないことがあるのは、私たちが生物としてだけでなく人間としても生きているからです。  
生物としては可能でも、人間としてはできないこと、やりたくないことはあります。

だから、「食べるか食べないか」は、人によって違います。  
その人が生きている社会によつても、時代によつても、文化によつても違います。  
分節は、きわめて恣意的なものなのです。

でも考えてみると、不思議ですよね。  
海老や蟹って、海に暮らしている昆虫です、いってみれば。

だから、コオロギの唐揚げ、かなりおいしいらしいですよ。  
、、、と言つてゐる私は食べませんが。

#### iv) 差異化／同一化

この世界は混沌としている、ということは、そもそも切れ目がない、ということです。

たとえば、時間。

ここからここまでが1月1日、というのは、人間の都合で恣意的に入れた切れ目にすぎません。

が、その結果、12月31日と1月1日の「違い」が生まれます。

1月1日と1月2日の「違い」が生まれます。

つまり、もともと「違い」があるから分節しているのではなく、むしろ分節することで「違い」を生み出しているのです。

これを「差異化」と呼びます。

差異化すると、そこには、他とは「違う」特別な意味をもつものが生まれます。

ただの時間の流れのなかに、1月1日という特別な日が誕生します。

差異化とは、単に「違い」を生み出すことではなく、他と区別された、特別な意味をもつものとして浮かび上がらせることです。

その差異化と同時に起こるのが「同一化」です。

1月1日を他の日と差異化した結果、その裏返しとして、その日24時間は、「同じ」1月1日と見なされます。

この同一化は、もちろん、「自己同一性」、**アイデンティティ** (identity) と深くかかわっています。

自己同一性とは、たとえば、5歳の時の自分も、今の自分も、同じ一つの「自分」だと思うことです。

その裏側で、「自分」を他者と区別する差異化が起こっています。

#### v) 世界認識

ここまで話してきたことでわかったと思いますが、、、

分節は世界をバラバラにすることではありません。

分節とは、世界のある部分を区切って、人間の生にとって特別な意味をもつものとして浮かび上がらせることです（差異化）。

そうすることで、この世界は、人間が生きられる、人間と深く結びついたものになります（秩序化）。

ということは、、、

「この世界がどのように分節されているか」とは、「この世界が私たちにとってどのような意味をもつのか」ということであり、「この世界が私たちにどのように見えるか」ということです。

その意味で、分節とは**世界認識**であるといえます。